

「性的マイノリティ」の語りにおける言語表現、
ジェンダー、セクシュアリティ
——テーマ分析を用いて——

薛 小 凡^{*1} 青 野 篤 子^{*2}

Linguistic expressions, gender, and sexuality in sexual minorities'
narratives:

Using the thematic analysis

XUE Xiaofan and AONO Atsuko

Abstract

This study focuses on the relationship among Japanese linguistic expressions, gender, and sexuality in sexual minorities' narrative. We conducted semi-structured interviews with five participants who have various gender identities or sexual orientations, referred to as "sexuality", in later text. In Xue & Aono (2018)'s study, these transcriptions were analyzed with co-occurrence networks. Based on that result, we used Transcriptions to examine directions of influences in the relationship in co-occurrence networks by the thematic analysis. As the result, nine themes were abstracted, including "dispute with the family", "resisting or obeying gender norm", and "minority stress". In conclusion, resisting gender norm, participants use linguistic expressions that are consistent with their own sexuality. One's linguistic expressions reflect their own sexuality and attitude with gender norm. Expressions about sexuality that contradict with gender norm generates minority stress.

Keywords : linguistic expressions, gender, sexuality, sexual minority, thematic analysis

問題と目的

言語は人間の思考や感情を他者に伝える媒介物であり、社会的に構築されるものである。そして、社会という現実言語を通して構築される (Burr、1995 田中訳 1997)。身体性の性もセクシュアリティも、ジェンダー化された言語により構築されるものである (Butler、2011 竹村訳 2018)。一方、言語は、社会的に構築されたジェンダーや社会的期待を反映し、言語上の差異が社会不平等を再生産するものとされる (Lakoff、1975 秋葉・川瀬訳 1990)。

日本語表現の中には、ジェンダーによる言葉遣いの差異が多く含まれ、社会のジェンダー規範から作りだされた男性語と女性語の区別がある (寿岳、1979)。特に、女性語は女らしさを求める言語であり、日本社会が女性に期待・要求している「女性像」を遵守するという「使用の原則」が浮かび上がってくる (宇佐美、1997)。

しかし近年、現代日本語における性差は縮小しているという指摘がある。このような変化は、職場のような公的な場面などにおける発話に出現してきて、男女ともポライトネスの高い日本語表現を使用することがあげられ

キーワード：言語表現、ジェンダー、セクシュアリティ、性的マイノリティ、テーマ分析

*1 平成31年度生 ジェンダー学際研究専攻

*2 福山大学

る（宮崎、2016；現代日本語研究会、2011；高崎、2004）。

また、日本語表現の変化は、若者と「性的マイノリティ」(LGBT)およびその周辺に頻繁に現れているという指摘がある。その中でもっとも目立つのは「おネエことば」に関する研究と言える。「性的マイノリティ」を自認する人たちが、おネエことばのような言語表現を通して、ジェンダー越境を試みる(既存のジェンダー規範から逸脱する)と想定される(中村, 2012)。一方、これらのことばはジェンダーと結びついた日本語表現であり、ジェンダーを再生産し、ますます補強していると言えるであろう(遠藤, 1998; クレア, 2013)。

Deaux & Stewart (2001 土井訳 2004)によれば、社会のジェンダー規範、たとえば男女二元論、異性愛規範、性別役割の概念が個々人のジェンダー観、セクシュアリティに浸透していき、ジェンダー観、セクシュアリティを形成する。そして、個々人はジェンダー観と一致した言語・非言語的行動を示すようになると述べている。そこで、言語を通してどのようにジェンダーが作り出されるのか、そして抵抗にあうのかという新しい研究の課題が提出されたと述べている (Crawford, 2001 川崎訳 2004)。

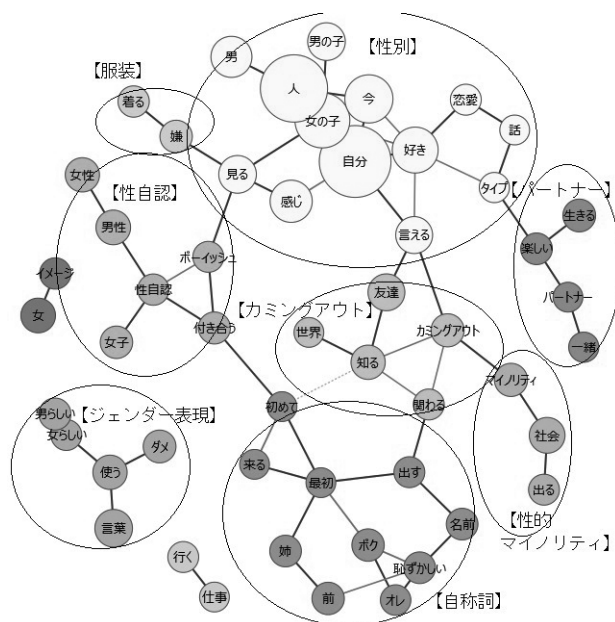


Table 1 何人かの共起ネットワークに共通にみられた抽出語、語と語の結びつき、語群

抽出語	自分、男、女、言葉、認める、受け入れる、理解、好き、恋愛、付き合う、お父さん、親父
語と語の結びつき	女（性）—自分—男（性）、女（の子）—好き—男（の子）、女—人—男
語群	自称詞、言葉（お父さん、親父という抽出語を含む）、親子、服装、性自認、セクシュアリティ、性別、恋愛、パートナー、結婚、カミングアウト、人間関係、友達

Figure 1 Aさんの共起ネットワーク
(薩・青野、2019)

薛・青野(2018)は、1人のゲイを自認する人のライフストーリーから、言語表現、ジェンダー、セクシュアリティの関連性を検討し、個人が使用する言語表現、特に自称詞の選択・使用も、既存のジェンダー規範にしたがう言語表現を参照し、自らのセクシュアリティに合わせたものとなっていたことを見出した。しかも、個人が有するセクシュアリティもジェンダー規範に抵抗しつつも受け入れた結果である。また、薛・青野(2019)はセクシュアリティの多様性に配慮し、「性的マイノリティ」を自認し、セクシュアリティの異なる5名の協力者の語りにおける言語表現、ジェンダー、セクシュアリティの関連性の有無を検討した。KH Coderを用いた共起ネットワーク分析の結果から、ジェンダーとセクシュアリティの関連性が推測され、さらに、言語表現との関連性もようやく知ることができた。分析結果の共起ネットワークの一例を、Figure 1のように示している。

薛・青野（2019）の研究結果は、三者の関連性があることを示したものであるが、インタビューデータにある文脈を活用して、具体的な関連性の内容を明らかにするまでは至らなかった。そこで本研究では、薛・青野（2019）に引き続き、計量的テキスト分析の結果を踏まえて、テーマ分析を行い、言語表現、ジェンダー、セクシュアリティの三者の関連について影響の方向性を検討し、さらに三者間の関連性を示すモデルを作成しようとするものである。

テーマ分析は質的研究の手法であり、量的研究を補完するためにも用いられ (Braun & Clarke, 2006)、既存

の先行研究や理論にもとづき、インタビューデータからテーマを抽出して分析を深めることができる（伊賀、2009；土屋、2013）。本研究におけるテーマ分析の手順では、まず、インタビューデータそのものに立ち返り、Table 1 に示している共起ネットワークにより見出された共通の抽出語、語と語の結びつき、語群に即して、見出されたテキストと前後の文脈に注目し、解釈する。そして、テーマを生成し命名と解釈を行う。その上で、言語表現、ジェンダー、セクシュアリティの関連の方向性を検討する。

方法

協力者 機縁法による5名の「性的マイノリティ」を自認する合計5名の協力を得た。Aさんはトランスジェンダー（FTM）を自認する男性であり、BさんはバイセクシュアルのXジェンダー（戸籍上が女性）であり、Cさんはトランスジェンダー（FTM）の男性であり、Dさんはバイセクシュアルの女性であり、Eさんはゲイであった。

インタビューの手続き 研究を開始するにあたり、福山大学研究倫理審査委員会の承認を得た（H139）。研究上必要な倫理的配慮とプライバシーへの配慮を協力者に丁寧に説明し、同意書にサインしてもらった。以下のような大まかな質問を投げかけ、それへの回答からさらに質問を行う半構造化インタビューを、一回1時間半程度で全員に2回ずつ行い、聞き取った内容を逐語録に起こした。

インタビュー・ガイドライン 1. ご自分のセクシュアリティの性自認、性的指向、そして今までのそれらに関する経験について、お話を聞きたいです。

2. ジェンダー、つまり社会的性差について、どう思われるか、お聞かせください。

3. ご自分のことば遣い、また日本語の中でのいわゆる「男ことば」と「女ことば」についてどう思われますか。

分析方法 まず、共起ネットワーク分析により数名に共通に見出された抽出語、語と語の結びつき、語群（Table 1）をコードとみなし、それらを反映したテキストを見つけた。そのテキストと前後の文脈に注目し、抽出語、語と語の結びつきや語群が有する意味をテキストにしたがって解釈した。次に、全ての協力者のテキストから、類似している、あるいは反対の意味をもつテキストを抽出し、これらのテキストをカテゴリー化した。そして、各カテゴリーが表す意味を帰納的に命名し、テーマを作成した。すなわち、抽出語、語と語の結びつき、語群からコードを見つけ、コードを含む短文（テーマ）を作成した。

分析結果

テーマ分析の結果を以下のように示している。作成したテーマの名称を<>で呈示し、解釈を記述した。また、テーマを浮上させたテキストを例示し、テーマが反映できる語りにアンダーラインを引いて示した。

<父親に対する反発> 女性のバイセクシュアルのDさんとゲイのEさんは性自認に違和感はないが、性的指向が異性愛規範に反している。父親に対する反発がみられ、それが性的指向あるいは言語表現の使用に影響を与えることが以下のインタビュー内容から推測される。

D：（母が）再婚してるんで、前のお父さんは虐待まではいかんけど…暴力的というか優しいけど、カァーとなったりすると感情的になる人かなと思います。…多分そこかなと。女の子を好きになるきっかけは男が怖いというイメージかなって思います。

E：よく小さいころから親父のことがちょっと嫌いで、親父にはなりたくないなと思ってたから、…親父が多少暴力的な感じ、…やっぱまあちょっと偉そうというか、…わかんないんですけど、うーんまあ、声もでかいし、いろいろ嫌い…今も、今も嫌いですけど。

<母親への親近感> 一方、この2名の協力者には母親に対する依存、信頼感が見られた。母親に受け入れら

れることを通して、特に女性のDさんは自分のこと（主に有するセクシュアリティ）をより認める傾向がみられた。また、男性のEさんは幼児期から母親の様子を見て、自身のセクシュアリティに合した女の子っぽいぐさやしゃべり方を習得した。

D：（カミングアウトについて）お母さんには言ってます、お父さんには直接的には言っていないけど。（お母さんは）へーみたいなの、それに対して何でとか言われることもなく。

（自分のことを考える時）周りの目とかは気にしたことないですね。それを私のお母さん含めて受け入れてくれた環境にいたから、そんなに深く思ったことはないですね。

E：（小さい頃から女の子っぽいぐさやしゃべり方をしていた）なんか自分のしゃべり方とかしぐさが、保護者のお母さんとかに似てしまった。

母親の方はマザコンぐらいたぶんずっと一緒にいて、いろいろ困ったことがあったら母親に言います。

＜性自認の揺らぎと確立＞ トランスジェンダー（FTM）のAさんとCさんは性自認と性的指向が安定しているが、性自認の確立のきっかけは異なる。Aさんは恋愛相手の性別から、Cさんは生理的器官への違和感から性転換の願望が生じたと推測できる。ただし、Cさん、Aさんとも、同性愛者という性的指向を否定する語りがみられた。

A：僕は初恋が女の子だったんですよ。なんか女の子を好きな女の子と付き合うわけだから…やっぱり男性として見て欲しかった自分がいたから。…だからその子が初めて男子と思ってみてくれてから…その子のおかげで自分の性自認がはっきりしたというのか。

C：いつから気づいたか。…2歳。分からんのじゃけど、八百屋に行ったらちんこが欲しいと、親に。…無意識のうちにその時多分自分の性自認が男の子だった。

…なんか自分、レズビアンって言うのは女性じゃあおもって女性を好きな人をレズビアンだと思う。じゃけ自分は違うって。

Eさんは男性への恋愛感情に気づいたことにより女性への恋愛感情や性的指向を否定し、自身の性的指向を再確認する。

E：（自分が同性愛者であることに）気づいたとかいう意識さえもはやなくて、女の子が好きな時期もあったんですけど、…でも実際男の子が気になるってことに自分が気づいたというより、自然にそう思ったので

また、BさんとDさんの性自認の確立過程には、類似した部分がみられ、それは性別変更を望まずに、他の性を自認することである。

B：私ももしかしたら男なのかもって思った時があったんですけど、ただ胸をとったりとか、なんか女性の機能を全部取っちゃったりする手術をしてまで男になりたいとか思わないから多分違うんだろうなってゆう風に思って…

D：ずっと悩んでたんですよ。私は男になりたい女の子なのか、女の子のままで女の子が好きなのか、…女の子の見た目のままで女の子が好きなんだったら、…ありのままで生きていたいかなって感じです。

しかし、Bさんには性自認と性的指向の両方に揺らぎがあり、自身のジェンダー観と社会的ジェンダー規範と

の葛藤がもっとも強く、ずれが大きい協力者である。このような葛藤とずれは、Bさんのジェンダー規範に対する強い抵抗とそれへの同調圧力という両価的な感情から生み出されるものと考えられた。

B: 私こう中性というものに対して例えば私時々はお、不定性なんですよ。男だったり女だったりする日もあるし、わあちょっと男だなって気持ちがある時もある。…それ以降はXジェンダーっていうまあよくわからないけど、男でも女でもないですよってゆうのを名乗ろうとしています。

<ジェンダー規範へのとらわれ> BさんとDさんはバイセクシュアルを自認し、男性とも女性とも付き合うことがあるが、Bさんは相手の性別により自分の性別役割が変わると語った。Dさんは、付き合う相手が普通の男性か女性、すなわち男らしい男性か女らしい女性であると語った。さらに、トランスジェンダー（FTM）のCさんには、BさんとDさんと同じようにジェンダー規範にしたがって暮らしたい願望がみられた。

B: なんか女の子相手にしてる時だと私なんか男側になってしまうんですよね。…まあ男性だったら私女性側になっちゃうのでやっぱまあ支えないと、とはなるんですよね。やっぱ男性の人って仕事すごい大事だと思うので。

D: …中性的で男寄りな人と付き合うくらいなら普通の男の人と付き合います。…見た目が男っぽい女の子は私好きにならないです。…普通に見た目が女の子を好きになるんですよ。…ざっくり言ったら、相手のほうが普通で女の子、私のほうが男っぽいので…

C: 男らしい。ちゃんと仕事する人。人を守るだけの仕事をして、その責任をとれる人。自分の中でそうなんよ。…やっぱ男は責任取らなあかんってゆう。自分の中で男と女の違いゆうたら、やっぱ女は守るもので、男が責任とるもの。

このような内容から、ジェンダー規範、特に性別役割分業、ジェンダーステレオタイプが「性的マイノリティ」の人の中にも根強いものであると言える。

<服装による主張> しかし、個人の性自認が世間一般のジェンダー規範に合致しない場合、当事者たちがあえてジェンダー規範に反する物事を通して個人の性自認を主張する傾向がみられた。トランスジェンダー（FTM）のAさんとXジェンダーのBさんはその傾向を服装によって強く表す。

A: 女性の制服ってところもあって。僕それもすごい嫌だったから仕事選ぶときに何を一番重要視したかって言うと制服。もうスカートは絶対嫌だったから。…もう会社より服装の方がストレスやったんで…

B: こうスカートが嫌だと思ってみたりだとか、こう女性とゆうこと自体に嫌な思いがあるのかなあなんて思ってたんですね。…ネクタイだからその学校選んだってのもあるんですけど。…なんか自分の中ではなんかネクタイってアイデンティティみたい…

<家族との葛藤> なお、セクシュアリティはジェンダー規範を基礎に形成されたものである。家族との関係、家族のジェンダー観に対する反発は自身のセクシュアリティの形成あるいはセクシュアリティの受容に大きな影響を与える。

A: (家族は) 名前はなかなか僕の名前では読んでくれないの。受け容れきれないのかわかんないけど、…僕はそこをちょっとうーんと思ったりするけど…

B: (性別違和のこと) 家でもあんたは違うって毎日言われて、で、それだと自分がおかしいんだとだんだん孤独になっていきますよね。

C: でも嫌だっていう、親が女の子として扱うわけじゃん。でもそれを受け容れとったんじゃないかなって思う、ある意味しょうがない、…お前はおかしいって。いや親がお前おかしい、育て方が悪かったんかなあと、私が悪かったんよねって。親が自分を責める。その言葉の中で自分もやっぱおかしいんじゃないと。

D: 受け入れたとは言うけど、親としての希望、子供に対する希望みたいなのは普通に結婚して幸せになってほしいと思うっていうのは言われたけど。

E: (ジェンダー観について) うちの家が結構、少し言い方が悪いですけど、ちょっと古い家なのかなと思って。…なんか家系的にもそういう、まあ僕もちょっとそう、それを一緒に引きずってる感があって、うーん。

<自称詞³へのこだわり> Aさん、Bさん、Cさんとも自称詞に言及した。性自認と日本語表現、特に自称詞の使用との関係も注目され、自称詞とジェンダーの強い関連性がみられた。

Aさんは、戸籍変更の前後で、すなわち女性であったときと今の男性であるときで、使用する自称詞が異なる。Cさんは小さい頃から自分のことを男の子だと考えたため、自称詞に注意を払うことはなかった。しかし、その後、日本語の自称詞におけるジェンダー差に気づいた。BさんはXジェンダーという流動的な性自認を有し、それに合わせて自称詞を選択し使用する。ただし、いずれにしても、ジェンダーにとらわれる自称詞を使用する傾向が強い。

A: 自分のことをボクと、それは、あの戸籍上女性だった時は、言いたかったけど、戸籍を変えてから初めて僕の中でゴーが出たんですよ。…オレも普通に言います。

C: 普通の女子の言葉で当時は言っていた。…高校になって、…ワイとか、普通に気にしない自分のことを。(ほかの自称詞を使わなく) 自分のイメージじゃあないし、…ここの女性っぽい言葉遣い、日本語の中で女性はワタシっていう。まあ男性はオレとかボクとか使うけど、ほうじゃ。あんまり言葉の違いそんなに気を付けたことがないけえ

B: (中性とかXジェンダーに) ふさわしい態度とか言葉遣いをしないといけないかなと思ったので、…その時私はボクって言ってた。女のワタシでなく、男もワタシと言う。私ボクって言葉嫌いじゃなかったんですけど、やっぱりちょっと不自然ですよ。

また、性的指向がジェンダー規範に合致しないDさんとEさんの語りには、自称詞とセクシュアリティ及びジェンダーとの関連性がみられた。

Dさんは、男性・女性にふさわしくない自称詞を使用する人に対する違和感を強くもっており、受け入れないようにみえた。一方、Eさんは、性別違和の人がもつ自称詞に対する違和感を理解しつつ、自分が使用する自称詞に対する理解も深める。

D: ちょっとカジュアルな感じの女の子がオレとか言ってもそんな違和感ないんですけど。男の人にアタシとか言われたらちょっと引くかもしれないですね。

E: 僕は日本語の男女の違いがあること自体あんまり気づいてないから何かあるんですかね逆に。…もし自分が気持ちは女性なのに男の子として生まれてきたときに、無理にボクとかオレって言わないといけないうてなると、しんどいかなと思います。僕ってあんまりオレって言ったことがなくて、でも理由はわかんないんで

すけど、もしかしたらそれもあるのかなと思って。

＜マイノリティ・ストレス＞ 性的「マイノリティ」であるがゆえのストレス（Meyer、1995、2003）を協力者全員が感じていた。それは、社会の偏見や差別、「性的マイノリティ」というスティグマからくるものである。それから逃れるために自らのセクシュアリティを隠したり、ジェンダー規範に従う必要にも迫られる。しかし、ジェンダー規範にとらわれた自称詞の使用、言語表現、会話内容、人からの評価、人との付き合いがさらにストレスになっていた。

A：（学生時代）恋愛トークを避ける。でも言わなきゃならない場合もあるからそういう時はなんか、…こう、ちょっとばやかすと言うか、あんま具体的には言っていなかったっすね。ううん、そうそう。でも結構恋愛話はストレスでしたね。

B：親の理解もう、まったくないんだから、死ぬまで言えない。今でも親に知られるぐらいなら死んだ方がましだと思っています。

C：中学ではストレスを感じると思う。感じたと思うよ。…あの人レズなんじゃって言われたら、それは嫌。いや、違うもん。それは違う。でも、男性を好きじゃないイコールレズなんよ。

D：相手の方からね、彼女からね。不安だって言われます。自分の中ではその子も多分普通に結婚して、お家だと厳しいから、結婚せんといけんしするもんだと思ってたらこうなってるので今。…だから多分ストレスを感じてるんだろうなと思っています。

E：悩んで、例えば、これは軽いかもしれないですけど、女の子の趣味とかを聞かれても、あんまり答えにくいとかですかなあ。

＜家庭の構築と社会の認可＞ また、セクシュアリティが不安定で、ジェンダー規範に反するBさん、Dさん、Eさんにとっては、パートナーを探したり家庭をつくったりすることが問題になる。しかし一方で、セクシュアリティが不安定的なほど、社会に認められ、異性愛者と同じように普通に生活したい希望が強くみられた。しかし、今の社会は「性的マイノリティ」に対する受容がまだ低いことが推察でき、「性的マイノリティ」当事者が、家庭を作るのが困難であることを示していた。

E：…基本的に好きなのが普通の男の人ですけど、…僕が同性愛者であつたら、相手も同性愛者がないとちょっと成り立たないなあって。…ノンケの男性の人からはちょっと離れるというか、ノンケの人求めるのは止めようと思って。

D：普通じゃないのが嫌だなと思って。普通っていうのは普通に女で、男の人が好きで、結婚して、当たり前というか、そうじゃないことがしんどいなと思ってそのときは。わざわざ大変なほうを選んだっていうか、なったなみたいな。認めたくない感じ。

B：私たちは特別なことがほしいとは言っていないですよ。だって私好きな人がいたら好きな人がいるって言いたい。私が好きな服が着たいと。好きな人が出来たら結婚して子どもが持ちたいって。これ男女だったらできることじゃないですか普通に。…そこはまあ今の社会だとまだまだ。しょうがない。

考察

「性的マイノリティ」を自認する5名の協力者の語りから、＜父親に対する反発＞＜母親への親近感＞＜性自認の揺らぎと確立＞＜ジェンダー規範へのとらわれ＞＜服装による主張＞＜家族との葛藤＞＜自称詞へのこだわり＞＜マイノリティ・ストレス＞＜家庭の構築と社会の認可＞のテーマが抽出された。そして、これらのテーマを文脈から掘り下げるにより、言語表現・ジェンダー・セクシュアリティの関連性を考察した。

セクシュアリティの揺らぎと確立に影響する要因がいくつかある。個人は既存のセクシュアリティのあり様や男女二元論を主とするジェンダー規範を基準にして性自認と性的指向を判断し、ジェンダーにまつわる葛藤を経験しながら、最終的に自身のセクシュアリティを確立する。また、性自認と性的指向の相互影響がみられる。このことから、性自認と性的指向とも、ジェンダー規範の一部を受け入れた結果であることが示唆される。

また、セクシュアリティの多様性を慎重に考慮する必要があるものの、ジェンダー観、セクシュアリティは家族との関係から影響を受けることがうかがわれる。母親に対する親近感と母親からの理解は個人の性的指向の受容と確立に影響を与える。父親の権威がジェンダー規範を体現した伝統的な男性の象徴であると思われ、それに対する嫌悪と反発はジェンダー規範への抵抗の投影であることが推察でき、性自認の揺らぎと確立に影響を与える。

ジェンダー規範への批判と抵抗が個人の言語表現と服装に反映され、言語表現のうち、特に自称詞に対する選択、使用に影響し、自称詞は性自認との対応がみられる。すなわち、自称詞と服装の選択と性自認は相互に関連している。自称詞と服装は個人が有するジェンダーにかかわる葛藤とセクシュアリティを表出する手段である。そして、自称詞と服装の選び取りは、性自認を作り上げる重要な要因になっているとみなすことができる。

また、本研究の協力者にとっては、「性的マイノリティ」であることは、家族の形成や社会の承認を得ることが、男女二元論と異性愛規範が中心となっている現代日本のジェンダー社会での難題であると言える。ジェンダー規範に反するセクシュアリティを表出することがマイノリティ・ストレスの大きな要因になっていると考えられる。マイノリティ・ストレスは個人の内面にあるセクシュアリティと外部のジェンダー規範との葛藤により生じ、個人の内面にある現在のセクシュアリティの揺らぎ、あるいは将来のセクシュアリティのあり様に影響を及ぼしている。

以上に述べた関連性及びその方向性をまとめ、図示すると、Figure 2 のようになる。すなわち、ジェンダー規範に抵抗しながら、セクシュアリティの揺らぎに応じて言語表現を選択して使用する。そして、ジェンダー規範に反するセクシュアリティを表出することはマイノリティ・ストレスを生じ、そのストレスはセクシュアリティを揺るがせる。言語表現はジェンダー規範への抵抗ととらわれ、セクシュアリティの揺らぎと確立を反映する。

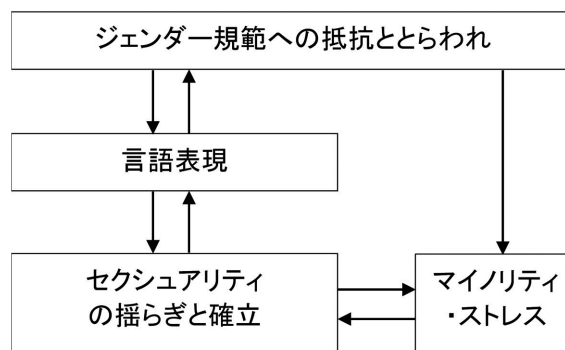


Figure 2 言語表現、ジェンダー、セクシュアリティの関連

この結果から、「性的マイノリティ」は「マジョリティ」と変わりがなく、セクシュアリティの形成や使用する言語表現においてジェンダー規範を超えることが難しいことが示唆された。Wardhaugh & Fuller (2014) が指摘したように、ジェンダー、セクシュアリティの平等を志向する言語の発展は言語の発展の歴史からみると始

まったばかりであり、ジェンダー規範から抜け出すのはまだ先のことである。

注

- 1 本来であれば「性的マイノリティ」という呼称は望ましくないと考えられるが、広く社会で用いられているこの呼称を用いることとする。
- 2 本論文は第1著者が2019年度に福山大学人間科学研究科へ提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。本論文の結果は、日本心理学会第83回大会（2019年）で発表された。
- 3 自称詞に関しては、協力者が語りにおける主語として用いた自称詞を除外し、言語表現を評価する際に一般名詞として語った自称詞を分析対象とした。

引用文献

- Braun, V. & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3, 77-101.
- Burr, V. (1995). *An introduction to social constructionism*. London: Routledge.
- （バー, V. 田中一彦（訳）（1997）. 社会的構築主義への招待—言説分析とは何か 川島書店）
- Butler, J. (2011). *Gender trouble: feminism and the subversion of identity*. London: Routledge.
- （バトラー, J. 竹村和子（訳）（2018）. ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱 青土社）
- Crawford, M. (2001). Gender and language. In R. K. Unger and Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of the psychology of women and gender* (pp. 228-244). New York: Wiley.
- （クロフォード, M. 川崎弥生（訳）（2004）. ジェンダーと言語 R. K. アンガー（編著）森永康子・青野篤子・福富護（監訳）日本心理学会ジェンダー研究会（訳）女性とジェンダーの心理学ハンドブック（pp.272-292）北大路書房）
- Deaux, K. & Stewart, A. J. (2001). Framing gendered identities. In R. K. Unger and Y. S. Lincoln (Eds.), *Handbook of the psychology of women and gender* (pp. 84-100). New York: Wiley.
- （デュオー, K. & スチュアート, A. J. 土井晶子（訳）（2004）. ジェンダー化されたアイデンティティを考える R. K. アンガー（編著）森永康子・青野篤子・福富護（監訳）日本心理学会ジェンダー研究会（訳）女性とジェンダーの心理学ハンドブック（pp. 100-118）北大路書房）
- 現代日本語研究会（2011）. 合本 女性のことば・男性のことば（職場編） ひつじ書房
- クレア・マリィ（2013）. 「おネエことば」論 青土社
- 寿岳 章子（1979）. 日本語と女 岩波新書
- Lakoff, R. (1975). *Language and women's place*. New York: HarperCollins
- （レイコフ, R. 秋葉れいのるすかつえ・川瀬裕子（訳）（1990）. 言語と性—英語における女性の地位— 有信堂）
- Meyer, I. H. (1995). Minority stress and mental health in gay men. *Journal of Health and Social Behavior*, 36, 38-56.
- Meyer, I. H. (2003). Prejudice, social stress, and mental health in lesbian, gay, and bisexual populations: Concept issues and research evidence. *Psychological Bulletin*, 129, 674-697.
- 宮崎 あゆみ（2016）. 日本の中学生のジェンダー—人称を巡るメタ語用的解釈——変容するジェンダー言語イデオロギー—— 社会言語科学, 19, 135-150.
- 中村 桃子（2012）. 「女ことば」の歴史 中村桃子（編） ジェンダー観で学ぶ言語学（pp.19-34） 世界思考社
- 遠藤 織枝（1998）. 気になります, この「ことば」 小学館
- 高崎 みどり（2004）. 話し言葉の性差——男性の「女性語」使用とジェンダーの関わりに注目して—— 明治大学人文科学研究紀要, 54, 159-173.
- 宇佐美 まゆみ（1997）. 言葉は社会を変えられる 明石書店
- 土屋 雅子（2013）. 質的分析手法としてのThematic analysisとanalytic rigour 質的心理学フォーラム, 5, 84-85
- Wardhaugh, R. & Fuller J. M. (2014). Language, gender, and sexuality. In Wardhaugh, R. & Fuller J. M., *An introduction to sociolinguistics*, (7th ed., pp. 311-338). Hoboken, New Jersey: Wiley-Blackwell.
- 薛 小凡・青野 篤子（2018）. 言語,ジェンダー観,セクシュアリティの関連モデルの検討：性的マイノリティの事例から 福山大学こころの健康相談室紀要, 12, 11-19.
- 薛 小凡・青野 篤子（2019）. 「性的マイノリティ」の語りにおける言語表現, ジェンダー, セクシュアリティ 福山大学こころの健康相談センター紀要, 1, 29-37.